

「平面授業構成研究」授業実践報告

—教科専門と教科教育の橋渡しのために—

新井知生*

Tomoo ARAI

A Practical Report on "Study on Teaching Contents of Painting"

—To Bridge between Specialty of Art and Art Education—

1. はじめに

美術教育専攻の2年生（後期）に行っている「平面授業構成研究」の授業内容を紹介する。昨年までこの授業は「絵画授業構成研究」という題目であったが、美術教育専攻内での内容構成研究授業の改編により、授業名が変更された。

教科専門教員が行う教科内容授業として組まれているものだが、絵画の専門教育を1年時の基礎から段階的に深化させた上で、その専門性が現場の教科内容とどのように関わっているかを、特定の題材をもとに研究するとともに、体験的制作を経て理解することを目的としている。

以下、教育学部の絵画専門教員が行う授業のあり方の見解をもとに、「平面授業構成研究」授業の内容、授業実践について記す。

2. 絵画専門教員が行なう教員養成授業の基本要素と「絵画授業構成研究」授業の位置づけ

「平面授業構成研究」について述べる前に、筆者の授業全体の構成と、その中での教科内容授業としての「平面授業構成研究」の位置づけについて記しておく。

鳥根大学教育学部では2004年の教員養成専門学部への改組に伴い、専門教育を行なう者の最大の使命も教員養成にふさわしい教育内容への変革、つまり授業そのものの改革が求められた。

美術のような実技教科は、学生に実習をさせておけばよいといった風潮が根強く残っており、このような意識から脱却することがまずは大切であり、このため、新生「美術教育専攻」の目的を「従来の専門家養成を主眼とした、教科の専門性を深めることのみならず傾斜しがちなカリキュラムから脱却し、造形媒体、表現形式等が幅広く弾力的に学べる」授業を行なう決意を表明し、それに沿ったカリキュラムを構築することとした。これは、制作者でもある筆者等美術研究室教員集団自らに意識変革を迫ることであり、決意と意気込みの表れであると思う。

筆者は、美術教師の条件とは、その知識や実技能力の前に、本人のうちに美術がかけがえのないものとしてあ

り、また美術を核として自分自身の人生を歩める人間としてあることが求められると思っている。そしてそのような美術教師の養成こそが、大学での美術教員養成の最終目的になると考えている。ローエンフェルドを持ち出すまでもなく、美術教育は芸術教育に収斂されるものではなく、全人的な人間教育である。

その理念に従い、また上記の改革を経て現在筆者が行っている絵画教育の骨子を述べたい。

まず、絵画専門教員が行なう教員養成授業の基本要素については次の4点が求められると考える。

- (1) 絵画の多様性・普遍性を基盤にした教育内容
- (2) 実技を通しての実質－専門的力量－の獲得
- (3) 教員養成における専門性という視点
- (4) 制作者としての制作体験から得た絵画観

(1)の美術全般に渡る知識と実技力をつけるため、基礎造形能力の獲得をまず始めとして、(2)実技を通してその専門能力の深化を充分に行い、美術の意義と、人間・社会にとっての価値を学生本人の中で血肉化させ、美術教員としての真の力量、資質を養う。

それとともに、(3)美術（絵画）の専門性が教育（現場の授業）にどうかかわるのかを常に念頭に置く、つまり専門性を教科内容に再構成させながら教授できるよう授業を組み立てられる視点が必要である。

そして(4)その全体の構成の中にいかに教員の絵画的価値観が組み込まれるかが専門教員の力量となろう。それは各大学と教員の特徴あるいは価値を示すものともなる。

以上を授業として組み立てると、①基礎造形教育、②専門性の深化、③専門の教科内容への読み解き、という順で構成することが、絵画専門教員が行なう教員養成授業と言える。その3点について具体的な筆者の授業科目と内容は、

①基礎造形教育

絵画の専門性を構成する造形要素を一つ一つ積み上げて学修し、絵画の専門的内容とその意味、また人間にとっての価値を探り確立する授業（「絵画基礎概説」）。

②専門性の深化

実技制作による専門能力の獲得、深化が基本なるが、単なる描画素材（油彩、水彩、アクリル等）とその技法や、モチーフの扱い（人物、風景、抽象等）等を指導するのではなく、実技を通して絵画制作の理念、目的、

* 鳥根大学教育学部芸術表現教育講座

スタイル、歴史的認識など、絵画についての幅広く網羅的な内容を総合的に身に付けさせる授業（「絵画概論」「絵画Ⅰ・Ⅱ」「絵画演習Ⅰ・Ⅱ」）。

③教科内容教育

以前は教科専門教員と教科教育教員のそれぞれの教育内容を、学生が自ら統合し現場の授業に対処していた、つまり大学教員はそれぞれの専門を教えっぱなしであったが、本来教育学部の教員は専門内容が現場の授業にどのように反映されるのか見通したうえで授業を行うことが必要であると考えた。

そうした意味で専門性と教科教育との橋渡しをする授業が「平面授業構成研究」と考えている。

3. 「平面授業構成研究」授業の内容

「平面授業構成研究」授業の目的は、授業教材の内容を、専門性の裏付けを持つことにより理解することである。そのため以下の2つの内容により授業を構成している。

(1) まず近・現代美術史上の絵画技法や技術、方法など専門の内容から筆者が題材を選出する。(ここに筆者の制作者としての絵画観が現れ、授業の独自性が生まれる。) その専門内容が授業教材と関連する部分・教科書で扱われる事項を抽出し、それを以下の段階を通して学修することで、教材に対して絵画専門の知識と技術・認識を持たせる。

①どの教材も美術史上の価値や意義と持っていることを講義、レポートによって学修・把握させる。

②制作体験により専門的内容を、実感を持って獲得する。いわば血肉化する。

(2) 以上の基礎的・体験的理解を持った上で教材研究をする。

教科書内容の研究をもとに各自が授業題材を設定し、その題材に含まれる美術専門内容等について研究し、レポートする。またその題材に相応しい作品を制作する。以下にその具体的内容を説明する。

(1) 近・現代美術史上からの題材研究

まず、題材として取り扱うのは、教科書の内容から絵画専門の思想・スタイル・素材・技法をもったもののうち、近代後期に発生した絵画技法-①コラージュ②マティエール-と、コンセプチュアル・アートを基軸とした現代の新しい形式の美術-③環境芸術作品(インスタレーションやアース・ワークなど)-の3つである。

これらの題材についてその意味、歴史、方法、技法等を講義し、そのコンセプトやスタイルの理解のためにレポートの作成と演習制作をする。

教員として授業題材の根拠を美術の歴史と専門性に置くための知識と力量を備えることを目標としているが、結果的に学生は近・現代美術になじみ、興味を持って学修するようになる。

①コラージュ

まずピカソのパピエ・コレ作品からコラージュの出現と絵画的意義を確かめたのち、その後のフォトモンタージュ、アッサンプラージュ、アキュミュレーション、コンバインペインティングなどへと続く素材の日常化、立体化への歴史的展開を見、コラージュという絵画思想と技法を学修する。この時、それぞれの表現・技法の代表的作家・作品を参考としてせることが不可欠である。マックス・エルンスト、クルト・シュビッターズ、フェルナンドス・アルマン、ジョセフ・コーネル、ロバート・ラウシェンバーグなど。

演習制作ではコラージュ材として

- ・紙類-包装紙、新聞紙、雑誌、和紙、色紙、ボール紙
 - ・布類-プリント模様布、木綿、麻布、ドンゴロス、ガーゼ
 - ・人工物-パスタなどの乾燥した食材、機械の部品や金具、金網
 - ・自然物-枝、葉(乾燥したもの)、砂、小石
- などから、どのようなコラージュ作品にするかで素材の選択をし、それぞれその素材でコラージュとしての意味内容が美術的価値観を持って表現できるかに留意し制作する。

(参考作品①)

②マティエール

ヤン・ファン・アイク→ティツィアーノ→レンブラント→モネ→ゴッホ→ルオー→シャガールへと続く油彩技法と表現の歴史をもとに、マティエールという概念の発生と展開について講義し、絵肌・画面上の凸凹・絵具のつき具合が、描写や色の面白さと同様に絵画的(造形的)要素のひとつとして感覚的な魅力を持つことを学修する。

参考作品としては、マティエール表現そのものを制作理念としている、タピエス、デュビッフェ、フォートリエ、プーリといったアンフォルメル画家たちや、斉藤義重、鳥海青児などの作品を提示する。

演習制作では、「アクリルメディウムなどで厚みをつけたものにいろいろな跡(痕)をつけて、マティエール技法による表現を研究しよう」という課題で、アクリル素材とそのさまざまな技法を組み合わせた制作を試みる。

(参考作品②)

③環境芸術作品

講義の部分では、まず美術史に現れた環境作品として、1970年代のアースワーク(ランドアート)の代表例、ロバート・スミッソンの「螺旋状の防波堤 1970」、ウォルター・デ・マリアの「稲妻の原野 1977」、アンディ・ゴールズワージー、大久保栄治、クリスト等の作品を紹介する。

次に絵画、彫刻等の伝統的形式に捉われない現代の形式としてインスタレーション、パフォーマンス、ハプニング、ビデオアートなど新しい美術と、それらの生まれる理念的源泉となったコンセプチュアルアートについて

講義し、また代表例をあげる。

- インスタレーション・クリスチャン・ボルタンスキー、ウォルフガング・ライプ、フェリックス・ゴンザレス・トレス、草間彌生、エルネスト・ネト、河口龍夫、内藤礼など。
 - パフォーマンス・ジョン・ケージ、オノ・ヨーコなど
 - ハプニング・ハイ・レッド・センターなど
 - ビデオアート・ナム・ジュン・パイク、ブルース・ナウマンなど
 - コンセプチュアルアート・マルセル・デュシャン、コースス、河原温など
- 演習制作では、「キャンパスの自然（または人工物）・環境に何らかの手を加え造形化し、その場の空間を異化、変容させる。新しい空間・世界が感じられるものを作り出す。」という課題のもと、大学構内の自然や材料を生かした制作をする。最終作品は写真での提出となる。（参考作品③）

（2）教材研究

上記の講義、演習を経て、授業題材と絵画の専門内容が繋がることを経験的に学修したのち、自ら絵画的題材を考案、設定し、その題材の絵画専門内容についてまとめ発表する。また題材に相応しい作品を制作する。

方法としては、

- ① 数種の美術科教科書から絵画的題材を抽出し、どのようなテーマ・内容・画家・素材が取り扱われているかを調査する。
 - ② 特定の絵画テーマ（ex.「風景に思いを込めて」「私・わたし・僕・自分」）を取り上げ、そのテーマに沿った具体的な授業題材を実際に設定する。
 - ③ 題材に相応しい作品を制作する。
 - ④ その題材に含まれる美術専門内容等についてレポート発表する。
- という段階を通して学修する。
その例をあげると、

○教材例Ⅰ

開隆堂「美術1」-P.10 「見ることの発見」から次のような題材を設定する。

「教室の一隅でみつけたもの」-水彩を使って描こう-何気ない日常の光景からその場所独特の表情や面白さを見つけよう！

この題材を授業として実現するために必要な美術専門内容について研究する。次のようなものが考えられる。

- 研究① 透明水彩の組成と特質について（絵具とは何か）（「絵画概論」にて既習）
- 研究② 水彩画の歴史と作品（浅井忠、セザンヌ、ワイエス、クレール等）（「絵画概論」にて既習）
- 研究③ 題材設定の意味について（リアリズムと造形的内容の発見）（「絵画基礎概説」にて既習）

●研究④ 構図の工夫について

- 演習 大学構内で教科書題材の意図に合致した場所を探し透明水彩で描く（参考作品④）

○教材例Ⅱ

開隆堂「美術2.3下」-P.18 「自然をキャンパスに」から次のような題材を設定する。

「校庭で見つけたもので絵を描こう」
自然にあるモノを集めたり、並べたり、組み合わせたりして自然の中で面白い絵（抽象）を描こう。

この題材を授業として実現するために必要な美術専門内容は次のようなものが考えられる。

- 研究① 「アースワーク」作品の成り立ちと理念
- 研究② アースワークアーティストについて
- 研究③ 自然物の材料研究

このような演習を通して教科書にある作品やテーマが美術的内容を持って題材になることを学習する。

2つだけ例を示したが、このような方法で教科書題材と美術専門内容に関連付けて把握することが、美術科教科書すべてのページについてできるはずであり、それをまとめることが筆者の次の研究テーマとなる。

4. おわりに

以上のように筆者の授業は、①特定の教材を定め（近、現代美術内容より抽出）その専門内容を講義し、演習制作をさせる。②教科書を調査し自分で研究題材を絞った上でその専門内容を研究、レポート及び演習制作する。という方法をとっているが、課題は専門内容が中学校・高校美術の教科書・授業内容と結びついているかをいかに把握させるか-専門内容の本質を教科書題材の中に見出させるか-である。

教科専門の教員として教科内容授業を行う場合、専門授業そのものとの関係をどのようにおこなうかが問題となる。

筆者の場合、専門授業は教科内容とは全く切り離して考えたい気持ちと、教科内容を常に頭に入れて置かなければならないという2つの気持ちの間を揺れ動いている感じがする。

まず前提として学生の専門能力が乏しいということがある。今の専門の授業数・時間数では教員として専門能力が十分にはつかないという危惧がある。そこで、とまかく専門は専門として、安易に現場の授業内容に歩み寄りたらないでやらなければいけないという、専門教員としての気概や自負のようなものも持っている。専門能力がなければ美術教員にはなれないということも強く感じる。しかし、そのような専門授業だけをやっている暇はないという焦りもある。

学生に能力があれば、専門を教科内容に咀嚼すること

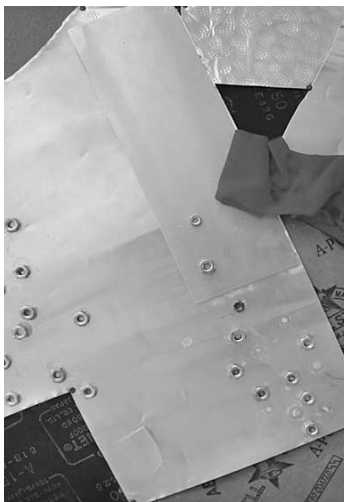
は学生ができるはずのことだが、この辺りの橋渡しをしてやることは、今の状況では必要ではないかと思ひ内容構成研究授業をしている。したがって専門—専門基礎—内容構成研究授業の関係をうまく取る必要がある。

結果的に私の授業では専門レベルを維持したいと思ひつつ、専門基礎内容に時間をかけ、また各授業の中で、現場で授業をする上でどうしてもわかって欲しいことや知っていなくてはいけないことを専門授業に挟み込んでいる。

また筆者の今年度の「平面授業構成研究」授業の後半部では、教材研究をしているが、題材の設定や開発といったところまでやっちゃっていいのかは自分自身疑問がある。これは教科教育の領域であり、教科専門教員が踏み込むべきものではないのではとも思う。



(参考作品③) 環境制作演習作品



(参考作品①) コラージュ演習作品



(参考作品④) 教材研究演習作品



(参考作品②) マティエール演習作品